

フレノロジー・レセプション（明治大正篇）  
—近代日本における骨相学のカルトグラフィ—（2）—

Phrenology's Reception in the Meiji and Taisho Eras:  
The Distribution of Phrenology in Modern Japan (2)

平野 亮\*  
HIRANO Ryo

The aim of this study is to outline the history of phrenology in early modern Japan based on extant historical materials. In the Meiji and Taisho eras, there were mainly two types of reception of phrenology: people either unknowingly accepted phrenological knowledge, techniques, and concepts related to phrenology, or they recognized phrenology and accepted it for itself. This is the second of two papers treating the latter phenomenon. There were many overlapping fields influenced by phrenology in Japan, such as natural science, the social sciences, humanities, and popular culture. This paper will give an overview of how phrenology was absorbed by these varied fields.

キーワード：骨相学，明治大正期，科学，通俗文化，教育界と法曹界

Key words : phrenology, the Meiji and Taisho eras, science, popular culture, education and jurist

はじめに

かつて骨相学は「科学 (science)」だった。それは、1800年代前半の西洋世界において真実性や確実性の源泉として機能をし、またそれゆえに活発な議論を呼ぶことにもなった「科学」であった<sup>1</sup>。形而上学的なそれ以前の生物研究を批判した骨相学理論の提唱者F・J・ガル (Franz Joseph Gall, 1758-1828) は、生物に関する「自然 (Natur)」を唯一の権威とする科学的探究としての学の存立を主張した。即ち、創造された生物 (creatures) の機能的・構造的「観察 (observation)」を行い記述すること、あたかも“自然という書物”を読み、解くのである<sup>2</sup>。科学史家の村上陽一郎は、「18世紀から19世紀へ」と題した節のなかで、「自然の秩序に対する強力な探究心と信頼が、科学革命の遂行の最大のモチーフであったとすれば、そうした自然の秩序を、自然の一部としての人間やそれが構成する社会、国家などにも発見しようとする新しい姿勢が、社会科学や人文科学の新たな編成を促した」と述べた<sup>3</sup>。被造物の一つに外ならない人間 (human nature) ——同時代のペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) は「自然の書 (Buch der Natur)」に喩えていた<sup>4</sup>——もまた自然研究によって解明され、社会及び人文科学を進展させてゆく時代が、科学としての骨相学の出現を希求したのである。

この“科学としての骨相学”について、ガルの元助手、J・G・シュプルツハイム (Johann Gaspar Spurzheim, 1776-1832) は、「特に人間に関する知識 (knowledge of

human nature) に貢献する」ものであると説いた<sup>5</sup>。「骨相学 (Phrenology)」の命名以前のこと、ガルと訣別し一人英米での学説の伝道に燃えていたシュプルツハイムは、「ガルとシュプルツハイム両博士の手になる」新しい体系を「人間学 (Anthropology)」という語で指示し、およそ次のような説明を行った。従来、人間の学はバラバラの名前の下に研究され、統合されることなく深められてきた。私たちの新しい科学はそれらを繋げる、いわば、総合的な「人間学」なのである、と<sup>6</sup>。いよいよ専門分化の進んでゆくその後の科学史を惟ればそれ自体興味深い言説だが、ここでは骨相学は人間学なのだという目論み、つまり本稿にとって示唆的な、「人間」に関するバラバラの専門領域が所謂のちの「骨相学」において総合されるのだ、というシュプルツハイムの言明に注目しよう。

本稿は、(1)と(2)の2報に分けて、近代日本における骨相学の流入・受容・展開の様相について諸史料に即して素描する、その(2)である。日本に西洋由来の骨相学が出現する仕方には、それをそれと知りながら受容した例と、それとは知らずに受容した例の大きく2通りの場合が考えられるが、本研究が取り扱うのは前者である。タイトルに掲げた「地図あるいはチャートを描くこと」を意味する「カルトグラフィ— (cartography)」の語は、この際、本研究が取り組む仕事の比喩となる。それは、対象となる明治大正期の日本において、西洋的術・知であった骨相学がいかなる専門的または通俗的な

\*兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻教育コミュニケーションコース 准教授

令和2年4月24日受理

フィールドに流入し、受容され、展開されたのか、その広がり様相、即ち“分布 (distribution)”の様子を記述する作業である。

シュプルツハイムは上述の「人間学」について、それを構成するバラバラの専門領域に「解剖学、生理学、医学、哲学、教育、宗教、立法」を挙げていた。逆に言えば、骨相学はこれらの各分野にわたって頻りに参照されるべき学問であり（と骨相学者たちは考えており）、実際に19世紀の西洋世界ではそれに留まらない広範多様な領域にその出現を観察することができるのである。前稿(1)では、骨相学の日本への移入を翻訳語や原書の輸入あるいは翻訳業、図書館蔵書リストなどにおいて跡付けし、整理した。本稿では、西洋に在ったそのような多岐のフィールドに見つかる骨相学の痕跡を、明治大正期の日本の史料において探索し、総合的に記述・分析することを目的とする。なお、以下に【 】で提示する各種の専門的・通俗的領域は、当時の骨相学受容の地点・領域を記録し記述するための仮設的な方法（トポス）である点を断っておく。史料の内容や社会背景については、適当な範囲で検討する。

## 1. 多領域にみられる骨相学の受容

### (1) 【医学】——【解剖学】【生理学】【医薬】

骨相学は医学、特に解剖学と生理学 (anatomy and physiology) に関する体系だと言われる。今回の調査では、文部省百科全書『骨相学』(1876) が解剖学書に分類された例を見つけることもできたが<sup>7</sup>、【解剖学】よりはむしろ、(初期には「原生学」とも訳されていた) 明治期の【生理学】のテキストに、ガルや骨相学への言及を多数見いだすことができた。但し大抵それらは、退けられた旧説として、である。その書きぶりは、『生理発蒙』(1866) が夙に「今日ノ実用ニ於テ別ニ賛揚スヘキノ益ナシ」<sup>8</sup>と断定していたのに類するもので、例えば東京大学医学部で行われたドイツ人医師ティーゲル (Ernst Tiegel, 1849-1889) の講義内容をベースに作成された『生理学』(1880) が、「ガル氏ノ説」は「当今全ク之ヲ非トス」<sup>9</sup>と記述していたのが典型的である。

そうは言っても、骨相学の科学的可能性を留保する記述がなかったわけではない<sup>10</sup>。それは、19世紀後半にブローカ (Paul Broca, 1824-1880) が言語野を「発見」したことでガル学説の脳機能局在論に関わる部分が再評価されるようになっていたことを背景としており、ハーツホーン (Henry Hartshorne, 1823-1897) 著『七科約説』(1879)<sup>11</sup> やランドイス (Leonard Landois, 1837-1902) 著『蘭氏生理学』(1900) などにもそのような記述が見られる。曰く、「久シク無稽強附トナ」されてきた骨相学だが、昨今の研究の進展を鑑みれば「全ク廃棄スルコトナク更ニ研究ヲ要スヘキ説トス」<sup>12</sup>、といった具合である。い

ずれにせよ、その頃の医学用語辞典に関連語彙がしばしば収録されていたことは、ある時期までの西洋医学界に確実に尾を引いていた、科学としての骨相学のアクチュアルな影響力の証左であろう<sup>13</sup>。

【医学】の一部として、別に【医薬】のフィールドも想定される。根拠となるのは、「独逸国医学大博士ゴール〔ガル〕氏」が調剤したと謳われた「生命保険丸」なる薬の広告の存在である<sup>14</sup>。胡散臭い雰囲気が漂わなくてもないが、東京朝日新聞 (1895年8月2日朝刊) に広告が打たれていた点や、製造元の住所が製薬業の一大拠点である大阪道修町界隈であった点などが、薬の信憑性と信頼性を高めるのに一役買っている<sup>15</sup>。その他にも、あの骨相図に“インスパイア”されたと思いき区画された禿頭図を掲げた「神経衰弱チレクター」なる医薬の広告もあった<sup>16</sup>。いずれの例も、何らかの専門的説得力を期待して骨相学が応用されたものと考えられる。

### (2) 【心理学】——【道徳科学】

西洋的な「心 (mind)」に関する理論をいち早く紹介した小幡篤次郎訳述『博物新編補遺』(1869) の原書 *Introduction to the Sciences* (初版1836) が、もともとは骨相学理論を伝道する目的で著わされた書であったことは、科学史家の松永俊男 (2005) が明らかにしている<sup>17</sup>。但し、周到にもそこには当時いたずらな批判を呼ぶ可能性のあった“Phrenology”の語が一度も登場しなかったため、翻訳もそれに関わるものと気がつかずになされ、展開したケースの一つであったと考えられる。

勿論、その後の明治大正期の【心理学】テキストにも、骨相学はしばしば登場する。しかしその扱いは、医学におけると同様、多くは否定的なものだった。巻末附録の心理学用語集に「フレノロジー (骨相学)」を挙げただけだった『根氏心理学』(1893)<sup>18</sup> はさて置き、ディッテス (Friedrich Dittes, 1829-1896)<sup>19</sup>、ヘフディング (Harald Höffding, 1843-1931)<sup>20</sup>、ヴント (Wilhelm Wundt, 1832-1920)<sup>21</sup> らの翻訳書では骨相学が言下に退けられていた。その理論形成に骨相学からの影響を大きく受けたとされるベイン (Alexander Bain, 1818-1903) のものとても例外ではない<sup>22</sup>。さらに、「学者ノ排斥スル所トナレリ」と解説した、「師範学校教科用書」を冠した高島平三郎の『心理綱要』(1893)<sup>23</sup> や、大瀬甚太郎『教育的心理学』(1913)<sup>24</sup> の如き日本人の著作でも事情は同じだった。

だが、これまた【医学】同様、部分的評価を与える論考も一方で存在した。日本初の心理学専門誌『心理研究』の第1号に掲載された富士川游「骨相と人相」(1912) は、解剖学と生理学の研究の進歩によって「或は立派な成績が挙るやうになるかも知れぬ」と骨相学の可能性を留保した<sup>25</sup>。「近時最も世の視聴を引ける」骨相学、と表現した川合貞一 (1907) は、「強ち其の無益ならざるを信」じることを述べ、骨相学者による脳の栄養や血行、脳重

量への重視を評価した<sup>26</sup>。

以上の他に特筆すべきは、西村茂樹（1828-1902）である。明六社のメンバーとして知られる西村は、『心学講義』（1885-86）8冊を著し、そのなかで「スプリットハイム斯字海」の記憶理論を紹介した<sup>27</sup>。フォーダーの言う骨相学の「垂直的な（vertical）」<sup>28</sup>記憶力の解説が一定の説得力を持ち得たことは、同時代の英文学者・永峰秀樹（1848-1927）が自身の骨相学転向の理由にそれを挙げていたことから推測できる<sup>29</sup>。だが何より興味深いのは、道徳思想家の西村が道徳研究の一環として骨相学関連の専門原書を幾冊も読み、個人的に翻訳していたという点である<sup>30</sup>。19世紀西洋では、犯罪という“反道徳”的事象の増加を背景の一つに、骨相学による「道徳哲学（moral philosophy）」や「道徳科学（moral science）」の実現が高唱されていた<sup>31</sup>。のちに「モラロジー」を提唱する広池千九郎（1866-1938）が骨相学を考察の対象に取り上げていた所以もここに存する<sup>32</sup>。【道徳科学】が骨相学を輸入したのである。

### (3) 【迷信】（擬似科学批判）

大衆的文脈の批判にも目を向けてみよう。とりわけ開化期の日本は、西洋のものなら何でも吸収せんとするが如き、渾然たる「近代化」の疾風怒濤を時代的特徴とした。それゆえに、正邪当否の判断もなされぬまま清濁一体の流入が起きた結果、輝かしき西洋文化に紛れて「迷信」も伝播した、と考える者たちもあつた。骨相学はそのような現代の新たな「迷信」の一つであるのだ、と。換言するならば、開化による“新しい科学”の移入に伴って必然的に出現することとなった“新しい迷信”，すなわち“擬似科学としての迷信”たる骨相学への批難である。

【迷信】のフィールドにおける旗頭は井上円了（1858-1919）である。東京大学卒業後に「不思議研究」を標榜した円了は、国民の迷信打破を目標に、ガルも顔負けの全国各地への巡回講演5400回を敢行した<sup>33</sup>。骨相学はその座で、「妖怪」や「狐狗狸」等と並ぶ迷信の一つとして取り上げられた。初の国定小学修身書の迷信に関する記述に不満を抱いたことが執筆動機だったという彼の『迷信解』（1904）では、「日本の人相ほどに甚だしからざるも其判断が余りに器械的にして、物差を以て精神を測るが如き有様なるは、笑ふべきの至りである」<sup>34</sup>と骨相学を笑っている。他所では、「教育上益する所必ず多からん」と、一部その価値を認めるような発言も残してはいたけれど<sup>35</sup>。

### (4) 【人類学】【人種主義】

井上円了が批判を繰り返していたことは、骨相学が実際には少なからぬ人々の関心を引いていたことの裏返しであるのは言うまでも無い。医学や心理学の専門書ではおよそ否定的に取り上げられがちだった骨相学だが、

それが「科学的」な人間診断をもたらす「有用な科学」であるとの期待は、様々な領域にまだ存在したのである。「人間」を明らかにしようとする心理学的アプローチに類型論と特性論があるが、骨相学に関してはある種どちらの理論としても機能し、集团的にまた個別的に対象を解明しようとした。

先ず、他国の人間や人種間の比較を類型的に行う【人類学】や【人種主義】は、西洋世界におけると同様に、骨相学が展開するフィールドとなった。例えば、日鮮同祖論者だった大隈重信（1906）が、「骨相学の上から云っても、韓人は日本人と同一である」と述べていたのは興味深い<sup>36</sup>。民族の同一性を骨相学に託して主張されたこの言説は、ちょうど、日英同盟締結を祝って1910年にロンドンで開催された日英博覧会のガイドブックに、「日本人と我々英国人との驚くべき類似性は……骨相学に通じた者にとっては明らかだ」と記述されたことに類するだろう<sup>37</sup>。この他、日本人と欧米人の優劣を骨相学的に論じる海外の小記事が、『国民之友』（1896）に翻訳掲載されたりもした<sup>38</sup>。

### (5) 【結婚】【占い】、etc.

一方、前稿でも考察したように、「個人」への意識の高まりが骨相学を希求したという近代的事態が明治大正期の日本に存在したことは、間違いなさそうだ。その名もずばり『個性鑑別法の研究』（1915）<sup>39</sup>という大正時代の本も、わざわざ骨相学を論じる一章を設けていた（もはや否定的にだが）。日常生活に有用なアドバイスを求める一般人が受容した心理学的体系、つまり佐藤達哉ら（1997）の言う「ポップ心理学」<sup>40</sup>として骨相学が注目された際、とくにこの“個人を知る”という関心が大きな駆動力だったようである。

一つの局面は、三人称の他者の読解である。対象には、先ず“特異な個人”があつた。例えば、新聞や『実業之日本』（1897年創刊）のようなビジネス誌とも言うべき雑誌などでよく見られた、著名人の骨相鑑定記事がその一例である。娯楽的側面もあつた「骨相学より観たる大隈伯」（1908）<sup>41</sup>、「骨相学上より見たる名士の悪相」（1909）<sup>42</sup>、「珍物骨相画」（1909）<sup>43</sup>等々、枚挙にいとまがない。人々のこの類いの関心については、一方の極には「天才」や「偉人」たちの解剖があり、他方の極には、“特異な個人”としての「犯罪者」などの解明への欲望も存在していたようだ。そして勿論、“特異でない”第三者も読解の対象となった。

骨相学が読解する個人のいま一つは、二人称である直接的な相手である。教育や犯罪者処遇などについては次節で後述するので、ここでは【結婚】を例に挙げておく。前稿の末部に引いた『フレノロジー術』の広告文には挙げられていなかったが、結婚もまた人生の重大な選択の一つであり、科学的に適切な配偶者の発見術として



の骨相学が論じられたフィールドであった。

骨相学に精通して配偶者を正しく選ぶことは、個人の幸せばかりでなく、直截に「富国強兵ヲ願」う心からも求められていた。「人民賢愚強弱ハ国家ノ盛衰ニ干渉」するのだから、適切な配偶者を選び、「非常ノ子」をもうけよとの由である<sup>44</sup>。簡易の骨相図を示

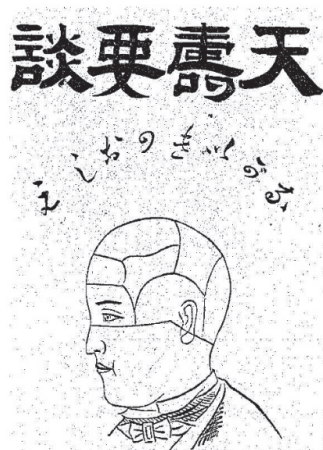


図1 『天寿要談』の表紙

して「夫婦配偶の相」の選択について論じた『天寿要談（ながいきのおしえ）』（1882）は、「頭のこの部分が大きければこのような性格で、小さければこうで…」という知恵を駆使して「婚媾の合ひ相」を図り、「子孫繁栄」すなわち遺伝に注意して配偶者を選択すべきことを教えていた（図1）<sup>45</sup>。体系的な遺伝学の起こる前、また日露戦争前後における優生学（Eugenics）の本格導入以前のこと、このような言説は近代的な優生思想の土壌が形成されていった歴史の一頁でもあったのだろう<sup>46</sup>。

一人称の「私」の読解にも骨相学は“寄与”した。社会的・通俗的機能としては、ちょうど今日の心理測定にあたるような、個性の測定や診断（言語化）を行うものとして期待が寄せられていたのだろう。

これに関わる領域には、【占い】もある。「占い」と「科学」を峻別することは、この際簡単ではなく、生活世界における両者の線引きは殊に曖昧で難しい。だが、「支那には易あり。西洋に骨相法あり。同じく是れうらないの道なり」（『土産の辻占』1890。傍点ママ）<sup>47</sup>と明言するものは、「是れは全くの実験上より生まれ出た」（『骨相学之応用』）<sup>48</sup>とか、古くから行われてきた中国由来の「無稽の臆断説」とは全く異なる（東京朝日新聞）<sup>49</sup>などと鼓吹された“科学としての骨相学”とは別物と見て、【占い】としておく。この占いに惹かれた人たちは、骨相学によって「運命之予断」を行い、時に「運勢改造」に取り組んだ。

#### (6) 【文学】

類型的な見方にしても特異な個人の特性的分析にしても、外面からいわゆる内面を表象することができるとしたら、それは表現者たちの助けになる。西洋では、絵画や小説、パントマイムなどに骨相学が応用されたが、日本でも【文学】と【芸術】が骨相学受容・展開のフィールドになっていたことを示す史料や先行研究がある。

【文学】においては、夏目漱石（1867-1916）の『吾輩は猫である』（1907）である。人間たちの滑稽な生活

が皮肉屋な飼い猫の視点から描かれる、その「観察する猫」に坪井秀人（2001）は骨相学の影響を見る<sup>50</sup>。観相学者の「猫」が登場人物たちを次々に読み解きそれを描写して読者に報告する、そのときの「まなざし」に骨相学の術・知が潜むという。実際、西洋の19世紀文学では「描写」がホットな問題となっていた、という指摘がある。「この人の耳たぶがこうで、目はこうで、髪はこういう色で縮れていて、……という描写が、いままで一行で陰険だと書けばすむところが延々と500行にもなってしまう」<sup>51</sup>。このことを踏まえれば、「猫」の、そして次に見る、日本の近代小説の理論構築に挑んだ坪内逍遙（1859-1935）による骨相学への着目が理解できる。

逍遙はその『小説神髓』（1886）で、「まづ人物の性質をばあらはに地の文もて」叙述するのが従来の方とは異なる西洋小説独特の人物描写であり、それをするためには「あらかじめ心理学の綱領を知り、人相骨相の学理をしも会得」する必要があると述べた<sup>52</sup>。つまり、江戸時代の作者も駆使した“名詮自性”——良くないことを企む人物が「悪井志庵」だったり、野暮な登場人物が「スクエア（Square）」だったりするような——の原理などに変わる文学の技法を、いまや骨相学が支持すると言うのだ。逍遙が特に影響を受けた心理学者はペインやスペンサーだったが<sup>53</sup>、当の彼らは骨相学に強い影響を受けていた。「専門学校の巡回講義」の折りに「懇親会で骨相学を演説して大喝采を博した」とは、読売新聞が報じた逍遙の講演の様子である<sup>54</sup>。前稿で都市に生じたコミュニケーションの問題にかかわる説を紹介したが、近代小説におけるこの「人物描写」の主題も、高山宏（1987）が指摘するように、本質的にはそれと同根のものであったと考えられる。

この点に関わって、もう少しだけ展開しておこう。1893年に出版されたルポルタージュ『最暗黒の東京』に、著者の松原岩五郎が東京下層民の様を「あらゆる骨相の標本を集めたるが如き」と表現した箇所がある<sup>55</sup>。停車場に騒然と群れなす人力車夫たちの人相が次々に描写され、「骨相」の一大コレクションが成立するのだ。19世紀フランスの諷刺画家ナダール（Nadar, 1820-1910）の仕事について、「人間が個々に違った顔をしているのはそのときに始まったことではないが、その差異に意識を集中することは新しいことだった」と多木浩二（2007）は分析した<sup>56</sup>。この言葉は、明治大正期の日本における骨相学受容に対する診断として読んでも面白い。ナダールや同時代の小説家バルザック（Honoré de Balzac, 1799-1850）らに認められるそのような表現と心性は、近世文学の類型的な顔面描写を脱して「人それぞれに固有な性質の表徴として顔を描くことを主張した」<sup>57</sup> 逍遙に流れ込み、骨相学への注目を促した。群衆としての貧困者たちも一人一人の個別の人間から成る、という群像的描

写を行った松原のルポが「骨相」の語を選択したとき、そこには、やはり当時の「骨相学」がなす文化的磁場の影響があったのではないだろうか。

### (7) 【美術】

【美術】については、現在の東京芸術大学の前身である東京美術学校（1887年設置）の初期の教員たちが、「骨相学」と繋がっていたことが挙げられる。図案科の初代主任教授を務めた福地復一（1862-1909）は、面貌研究の一環で骨相学について学んでおり、先行研究には、「おそらくかれの担当していた美術史の授業でも話したであろう」ことが指摘されている<sup>58</sup>。また、同時代に塑造科の初代主任教授を務めた長沼守敬（1857-1942）は、彫刻の「真正技術」者は「美術哲理ノ底蘊ヲ知覚シ、能ク骨相学等ヲ通曉」する必要があると語っていた<sup>59</sup>。「藝用解剖学」の嘱託講師として森鷗外（1862-1922）が東京美術学校で解剖学を講じていたのもちょうどその頃で、1900年には『公衆医事』に3回にわたって「ガルの学説」という小論を発表したのだった<sup>60</sup>。

### (8) 【骨相学】

骨相学を骨相学として受容し展開した、【骨相学】のフィールドも指摘しておかねばならない。本来は、本稿で分析する全領域と切り離して議論することはできないので、いくらか顕著な事例を数例挙げるに留めておく。

翻訳書や専門書が出版されたこと、巡回による、或いは写真による、骨相診断が盛んに行われていたことは、前稿でも見た。他に「フレノロジー学館」や「骨相学館」なる施設で診察が行われたり<sup>61</sup>、公開診断会なども実施され、そのことが新聞報道されてもいた<sup>62</sup>。自ら骨相学を修めたい者への道も用意されていた。頭部（頭蓋骨）と脳における各器官（organs）の場所の対応が即座に分かるめくり仕掛けの図が附録された手引き書や<sup>63</sup>、西洋でも人気を博した骨相胸像（phrenological bust）などが、自修者向けに販売されていたのだ（1914年の広告によると、「陶製模型」の定価は5円、郵送に50銭と、安い買い物ではなかった）（図2）<sup>64</sup>。また、とくに関連する専門書や論考が増加していった1890年前後以降の“小ブー



図2 日本語の骨相胸像（『性相』第68号，1914年）

ム”の頃には<sup>65</sup>、「フレノロジー研究生第一期試験問題」なるものまで存在した<sup>66</sup>。答案を「大阪南区高津社内大日本フレノロジー学館本部」に送付して、合格すれば「免状」を発行するということだった。

なお、シュプルツハイムが主要領域に挙げていた【宗教】についてだが、今回の調査では目立った例を見つけることができなかった。ガル学説－骨相学への根強い唯物論批判からも、西洋ではしばしば争点となったフィールドであったが、近代日本にそのような論争の痕跡を見出せていない。因みに、仏教の法相宗に「性相学（しょうぞうがく）」という研究があるが、それ自体は Phrenology とは無関係である<sup>67</sup>。

## 2. 明治大正期の教育志向と骨相学

さて、進化論で有名な英国の博物学者アルフレッド・ウォーレス（Alfred Russel Wallace, 1823-1913）は、その『素晴らしき世紀』（1899）のなかで、来たるべき新世紀における骨相学の躍進を確言した。20世紀、「骨相学は真の心の科学であることが証明」され、「教育、自己規律、犯罪者の矯正、狂人の治療的処置への実践的応用」において科学における最高の位置を手に入れることになるだろう、と<sup>68</sup>。実際の20世紀は骨相学にとってそのような時代にはならなかったが、ウォーレスが強調した教育（education）や犯罪者の矯正（reformatory treatment）の領域は、明治大正期の骨相学の移入・受容・展開においても幾分際立っていた。

### (1) 【犯罪学・刑事学】【法曹】【精神医療】

「犯罪学」とも「刑事学」とも訳されるクリミノロジー（Criminology）の誕生は、18世紀イタリアのベッカーリア（Cesare Beccaria, 1738-1794）らによる啓蒙主義的学説（旧派、古典学派）と、道徳統計（犯罪統計）を分析したケトレー（Adolphe Quetelet, 1796-1874）以降の、犯罪人類学を提唱したロンブローゾ（Cesare Lombroso, 1835-1909）らによる実証主義的学説（新派、近代学派）とに帰せられる<sup>69</sup>。彼らの議論からは、「民衆一般に対する実力あり且適切なる教育」を期した一般予防と、目的刑論、特に「犯人の改善、教育」を目指す特別予防としての教育刑論が展開した<sup>70</sup>。激増する犯罪件数の「洪水」が問題化していた19世紀西洋の社会を背景に、個性読解の術・知としての骨相学には「犯罪者」の科学的読解と、更にその先に、科学的に適切な処遇、矯正、指導の指針を示すプラクティカルな機能が期待されていたのである<sup>71</sup>。

日本におけるこのフィールドは、弁護士播磨龍城（辰治郎）と、その骨相学（性相学）の師匠にあたる5代目石龍子（1862-1927）によって推進された。2人は、専門誌『弁護士協会録事』に多数の骨相学記事を寄稿した。法曹界と「明治42年頃から大正末期までの12年間



は全国に石籠子ブームができる程日本的な名声を得た」<sup>72</sup> 石との紐帯の役を果たしたと思われる播磨は、同じ弁護士でもあったジョージ・コム（George Combe, 1788-1858）の訳書『性相学原論』（1917）に序文を寄せた人物でもあった。彼らに影響を受けた【犯罪学・刑事学】や【法曹】の人たちもいた<sup>73</sup>。

前述の通り、もともと「犯罪者」という悪徳を有した“特異な個人”への関心があった。19世紀フランスの死刑囚にして詩人、“特異な個性”たるラスネール（Pierre François Lacenaire, 1803-1836）の回想録には、彼がギロチンの予行演習のように感じたという骨相学者による「頭部の型取り」の様子が、頻出する骨相学への嘲笑と怨嗟の言に混じって、描かれている<sup>74</sup>（そして筆者が訪ねた180年後のパリの人類博物館（Musée de l'Homme）には彼の石膏頭部が本当に展示されていた）。日本でも、世間の耳目を大いに集めた「臀肉事件」の容疑者で、別事件で死刑判決を受けた野口男三郎（1880-1908）がいた。石膏頭部ではないのだが、彼が刑執行後の司法解剖を申し出たとき、その報に接した播磨は、解剖には骨相学者こそ参加すべきであり、そうすれば男三郎の「秘密破壊の座所が格外に膨れて居る」ことなどが立ち所に明らかにとうそぶいた<sup>75</sup>。

【精神医療】のフィールドも近接してある。「精神病学」を病理解剖の方面から進歩させた一人として、シュプルツハイムを数える医学史研究（1928）もある<sup>76</sup>。西洋でも盛んに議論されたし、石と播磨も応用の可能性を示唆していた<sup>77</sup>。結局「迷信や空想」と結論することになるが、1890年代後半の高校生時代には骨相学に興味を持ち、自分で実験もしたというようなエピソードを精神科医・森田正馬（1874-1938）も書き残している<sup>78</sup>。西洋では、所謂精神鑑定の仕事に骨相学者が参加していた場合もあったようだが<sup>79</sup>、日本ではどうだったのだろう。専門家の司法への直接的関与ということ言えば、石が東京控訴院に召喚されて私生児認知の鑑定に参加したということを経験した記事は残っている<sup>80</sup>。この他に、犯罪者や囚人の身体への類型的関心から骨相学が引かれていた例のあったことは、また言うまでもない<sup>81</sup>。

以上の諸点には、骨相学の影響下に犯罪人類学を構想したロンブローゾの影響も関連していた<sup>82</sup>。さらに、いずれの詳細も論じる紙幅がないが、新派刑法学の限界を骨相学で乗り越えようと目論んでいた播磨は、そのロンブローゾの犯罪者分類に基づきながら、「犯罪の源泉たる犯人の偏癖なる頭脳」に対する「根本的治療」を推奨した。「人為的改良」、すなわち「脳髓外科治療手術」である<sup>83</sup>。脳の「害悪部位の検定」は骨相学者には容易な仕業であるため、一致協力して、教育刑の対象外となった教育不可能な「変態の甚だしき者」を治療せよ、と言うのだった<sup>84</sup>。因みに、悪名高きロボトミー手

術（Lobotomy）は1935年に初めて報告された術式だが、脳の切除による「治療」や「矯正」はそれ以前から行われていたという<sup>85</sup>。

(2) 【教育】—【子育て】【修養】【職業指導】【衛生・養生】 etc.

相手の本性に合った正しい教育を計画し、実施する。骨相学者たちが「最も輝かしい成果」を主張していたばかりでなく、諷刺的にフローバール（Gustave Flaubert, 1821-1880）が小説に書き<sup>86</sup>、テプフェール（Rodolphe Töpffer, 1799-1846）が漫画に描いた<sup>87</sup>、【教育】である。

翻訳教育書に見られる骨相学の評価はまちまちだ。ニュージャージー州立師範学校長ハート（John S. Hart, 1810-1877）著『学室要論』（1876）には、寄宿学校にやってきた巡回骨相学者のエピソードがインチキ満載の滑稽譚として一章割かれている<sup>88</sup>。対して、キッドル（Henry Kidlle, 1824-1891）らの『教育辞林』は、「頭脳ノ組織ヲ區別シテ教育学ノ基礎」たりうる骨相学を論じ、しかし「教育上ニ応用スルノ度如何ニ就テハ其議論甚多シ」とした<sup>89</sup>。一方、サウスウェスタン師範学校長ホルブルック（Alfred Holbrook, 1816-1909）著『和氏授業法』（1879）には、科学分類表の「心学（phrenics）」の下位に、「精心理学〔心理学〕（psychology）」と並んで堂々と「骨相学（phrenology）」が挙げられていた<sup>90</sup>。

日本人教育家たちの関心と期待が骨相学に寄せられた一時期のあったことは、多くはないが、史料から跡づけることができる。例えば、「教育家学術家」の論説や研究調査結果の公表を役目とした帝国教育会機関誌『教育公報』には、「生理心学一斑」（1900）<sup>91</sup>、「脳皮質局部作用」（1907）<sup>92</sup>と題された骨相学記事が、複数回にわたって掲載された。その著者の高橋邦三（1861-1913）が京都商業学校長であったのをはじめ、柳井道民（1903）<sup>93</sup>や竹熊利雄（1920）<sup>94</sup>ら各地各種の学校長・教員らが、「科学的」な骨相学による教育の革新を論じた。これらは、前稿で引いた教育学者の横山（1908）が、従来「不思議」に思われてきた骨相学の理論が近時の心理学の進展により西洋で注目を（再び）集めつつある、と述べたことと符合しているようにも映る<sup>95</sup>。満州で発行されていた教育雑誌『南満教育』（1924）に、「被教育者の……純真の進歩を一層高むる」骨相学の可能性を語る記事を見つかることもできた<sup>96</sup>。

所謂「新教育」の思潮との合流も確認される。前出の竹熊は、骨相学を応用することで「児童本位の教育」、即ち教育学者小西重直（1875-1948）の言葉から引いた「児童の特殊性を通して普遍性を創造する」教育の理想を思い描いた。アメリカにおける進歩主義教育に対する骨相学の思想的影響は先行研究に指摘されてきたが<sup>97</sup>、要するに、新教育も骨相学も共に目を注いだ「個性」を、或いは「能力」の次元で科学的に分析しようとした時代の

産物として、両者を捉えられるかも知れない<sup>98</sup>。いずれにせよ、これにも関連する当時の教育活動に、児童の頭部計測があった。本稿で検討した種々のフィールドにおいても、骨相学は【人体計測】を伴って展開されていた。昭和に入ってなお新学校でも実践されていた頭部計測は、教育史研究のテーマとしても興味深い<sup>99</sup>。

【教育】に多く重なるが、【子育て】を別にフィールドとして想定してもよいかも知れない。昭和期の三田谷啓（1936）に至っては否定的言及に留まるものの<sup>100</sup>、遡れば「女子の天職」である「胎内教育」によって頭脳の凸凹、即ち子供の精神的発達が決まる、と主張する本もあった<sup>101</sup>。

やはり「児童教育」への応用を主張し、自著を全国の師範学校、孤児院、感化院に寄贈したという市川紀元二（1873-1905）は、これと同時に【自己教育】の実現を骨相学に託した<sup>102</sup>。これはファウラーらの「自己教育（self-culture, self-instruction）」論を受けたもので、日本では『西国立志編（Self-Help）』以来の自修、修養の歴史に位置づきうるものである<sup>103</sup>。新渡戸稲造（1862-1933）が主幹を務めた『実業之日本』（1897年創刊）における骨相学の頻出は、「立身出世」の自己教育、今日でいう「自己啓発」や「ビジネス」におけるその受容と展開を物語っている<sup>104</sup>。骨相が表徴する運命や能力は、通俗道徳論の言説よろしく<sup>105</sup>、「努力」次第で改良できるとされた<sup>106</sup>。骨相学の流入が影響を与えたとされる【記憶術】の歴史も、これらに関連づけて論じられる<sup>107</sup>。

【衛生・養生】も見出された。先述の『天寿要談』の記述は、骨相学を「衛生上に最も関係のある」部分に限って解説したとある。養生を食の面から論じた「食養法と性相学」（1912）という論考では、軍医の石塚左玄（1851-1909）の提唱した化学的食養法と「ガル式性相学」との重なりが指摘され、飲食によって脳髄各部の「大小形状能力」を「多少修正」できると説かれた<sup>108</sup>。【衛生・養生】は、医師アンドリュウ・コム（Andrew Combe, 1797-1847）の研究が特に扱った分野であり、葵文庫に所蔵された著作もそのような一冊であった<sup>109</sup>。

その他、比較的大きなフィールドの一つに【職業指導】があった。社会制度の変化によって新たに開かれた【職業指導】の領野に、骨相学が食い込んだ。カリキュラム研究のハーシェンソン（2008）が、アメリカの近代学校における職業指導（career counseling, vocational guidance）の取り組みは骨相学者らによって先駆的に導入された、と分析した事態が日本に流入したのである<sup>110</sup>。「選職尺度の一つとして之を信頼したい」と宣言して骨相学を紹介した『我が子の職業選択』（1920）も、職業選択の根拠のうち非科学的なものの筆頭に骨相学を挙げた論考「米国に於ける職業指導の原則」（1921）も、いずれにしる、当時における一定の影響を示した例で

あると言えよう。

同じ論法でいけば、骨相学（やロンブローゾ学説）に疑義を呈した『小学校』掲載の石田東向の論考（1908）も、当時の教育分野におけるかの受容・展開の広くかつ浅からんことを示唆している<sup>111</sup>。時代が下って、1962年に刊行された稲富栄次郎監修『教育人名辞典』（1962）に、ガル、シュプルツハイム、G・コムがそれぞれ単独立項されていたことは、ある意味日本も例外とはしない、教育と骨相学の結びつきの歴史を強く印象づける<sup>112</sup>。

## おわりに

明治大正期の日本において、骨相学は様々なフィールドにまたがるかたちで移入し、受容され、展開されていた。その分布の様子が、史料への骨相学の出現をプロットし記述する本研究の作業で明らかとなった。医学や心理学の専門書などでは専ら否定的に扱われたが、なお多岐にわたって肯定的期待が寄せられた事実のあったこと、分けても「教育」の志向との顕著な結びつきを見せていたことは見逃せない。それは、ある一つの歴史的な「人間学」の像を、フィールドの重複の上に結び浮かび上がらせ得ていたのかも知れない。

近代日本文化におけるそのような広範な分布は、しかし西洋世界においてそうであったような、骨相学が強力に大きな位置を文化の本流に占めたことを意味しまい。そして現代では、骨相学は「擬似科学（pseudoscience）」として歴史に名をとどめるばかりで、それ自体の科学としての社会的役割は全くないと言ってよい。だが、人間観という視点では、必ずしもそうではないだろう。例えば1963年、新技術だったTVの普及に合わせて新しい倫理「放送基準」が作成された際、「骨相」が改めて「非科学的な迷信」として警戒されたということがあった<sup>113</sup>。Phrenologyを直接指すものではないだろうが、「骨相」という言葉は容易に骨相学へのパスにもなる。オカルトであれ科学であれ、それが人間観において影響力を持ちうることは、本研究の描出した歴史も示唆するところである。況んや、「科学としての骨相学」がまだしも生き得ていた明治大正期の事象を検討するのなら、骨相学の影響や受容の意味を明確に区別し把握することが、歴史研究において必要・有効な場合もあるはずである。

最後に、論点を2つ示して結びとしよう。1つは、教育と法学というテーマである。「個性鑑別法は教育界、法曹界より生まれざるべからず」（『個性鑑別法の研究』1915）と言われたように、個性を科学的に知悉し、教育や矯正の効果を確実なものにしようとする心性、つまり教育志向が、結果的に両界を骨相学受容の主たるフィールドとした。西洋では、クーターやシェイピンら科学史家が、そのような骨相学の社会的面を「改良科学（reform science）」と分析し、社会改革や階級間の論争における

骨相学の機能を論述してきた<sup>114</sup>。日本においてそのような社会的機能を果たした明瞭な痕跡は、今回の調査では確認できなかった。継続した検討が必要だろうが、むしろ興味引かれるのは、教育や矯正と結びついた当時の人間観の方である。「能力」という観念の近代的生成史とも関わると考えられ、今後焦点化して論じられるとよいと思う<sup>115</sup>。

もう1つは、100年以上前の「都市化」と現代の「グローバル化」の類似と相違、という視点である。前稿で、「都市」に生じた相互の「見知らぬ他者」状況が、伝統社会には稀だった新しいコミュニケーションを必要とし、そこに骨相学が希求された、という説を紹介した。昨今の「グローバル化」もまた、世界各地よりの“見知らぬ他者”との日常的接触が想定されており、教育分野においても議論喧しい。類似する2つの状況間で、好対照をなしているようにも見えるのが、そのアプローチの一手の相違である。かつては、遠方から“ひとを見る眼”としての骨相学が求められ、現在は接近のうえ第一に“対話”が求められる。相互に排他的な姿勢ということではないが、現代の人間観と教育観を考察していくうえで、示唆に富んだ主題であるような気もする。

## 註

- 1 John van Wyhe, “Was phrenology a reform science?: towards a new generalization for phrenology,” *History of science*, vol.42, pp.313-331.
- 2 「聖書」と「自然」（または創造物）を「2冊の書物」に喩える西洋の科学観は、F・ベーコンやその時代の文献にしばしば見られる（e.g.『ベーコン』（成田成寿訳）世界の名著、中央公論社、1970年、293頁；*The two books of Francis Bacon: of the proficience and advancement of learning, diuine and humane*, London: Henrie Tomes, 1605, p.31）。中世以来用いられてきた比喩ではあるが（E・R・クルツイウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』（南大路振一ほか訳）みすず書房、1971年、464-473頁）、グーテンベルクらによる活版印刷法の開発（1450年頃）と宗教改革を経て、キリスト教界において聖書が信仰の中心として押し出されるようになった16世紀半ば以降（田川健三『書物としての新約聖書』勁草書房、1997年、491-493頁）の文化的状況が一層強力にした表現であろう。
- 3 村上陽一郎「IV 19世紀の諸様相」『思想史のなかの科学』木鐸社、1975年、137頁。
- 4 ペスタロッチ『隠者の夕暮れ・シュタンツだより』（長田新訳）岩波文庫、1982年、10頁（Pestalozzi, *Die Abendstunde eines Einsiedlers*, 2. Aufl. Schmid, 1845, S.12）。
- 5 J. G. Spurzheim, *The physiognomical system of Drs. Gall and Spurzheim*, 2nd ed., London: Baldwin, Cradock and Joy, 1815, p.1.
- 6 J. G. Spurzheim, *Outlines of the physiognomical system of Drs. Gall and Spurzheim: indicating the dispositions and manifestations of the mind*, London: Baldwin, Cradock, and Joy, 1815, p.4.
- 7 阿知波五郎「幕末明治初期（一八四〇—一八八七）解剖学書（内、外）目録について」『日本医学史雑誌』第22巻3号、1976年、21頁。
- 8 李邈撰『生理發蒙』（鳥村鼎鉉伸訳）五松桜、1866年、27丁オ。
- 9 永松東海『生理学』下巻、丸屋善七、1880年、292頁。
- 10 同様のことは、日本の教育事典に骨相学関連用語の出現を追った以前の調査報告の際にも指摘された（平野亮「日本の教育事典に見るフレノロジー」『研究論叢』第20号、神戸大学教育学会、2016年、40頁）。
- 11 賢理華都遮崙『七科約説』（太田用成・柴田邵平・虎岩武訳）上編、鳥村理助、1879年459頁（Henry Hartshorne, *A conspectus of the medical sciences*, 2nd ed., Philadelphia, 1874, p.292）。
- 12 蘭土亜『増訂 蘭氏生理学』（山田良叙訳）巻下、第7版、1900年、133頁（Leonard Landois, *Lehrbuch der Physiologie des Menschen*, Wien: Urban & Schwarzenberg, 1880, S.744）。
- 13 1886年刊行『独逸医学辞典』（新宮涼園・柴田承桂・武昌吉編『独逸医学辞典』英蘭堂、1886年、152頁）はドイツ語の“Phrenologie”を「脳相学」と翻訳し、これが後続のドイツ系医学用語辞典にも踏襲されていったらしい（例えば、『新医学大字典』（金原医籍、1902）や『袖珍医語字林』（東京医事新誌局、1903）など）。因みに、「欧語の医学用語に特化したものとしては……最初期のもの」（澤井直「第10章 医学教育における医学用語—用語の浸透と統一を中心に」『日本医学教育史』（坂井健雄編）東北大学出版会、2012年、330頁）である奥山虎章『医語類聚』（初版1873）には、一見して骨相学関連語彙は見つからないが、その「Craniology 頭蓋論」（75頁）が実は「ガルによって医学用語に取り込まれた」、後の骨相学を指していたことは、本書の底本である米国の生理学者ダングリソン（Robley Dunglison, 1798-1869）著 *Medical Lexicon* (Blanchard, 1839) の詳細な解説（pp.166-168）を参照することで明らかとなる。
- 14 ジュウゼツプゴール氏『フレノロジー術』（松田松樹訳述）松田丈吉、1895年、巻末広告。
- 15 「生命保険丸」については、くすりの道修町資料館（大阪市）にて『道修町文書目録—近代編（補遺）』などを調査したが、明治期の道修町界隈の業者たちが組織した組合の名簿に製造者の名は登場せず、どの



- ような薬であったかも解明することはできなかった。内藤記念くすり博物館 (各務原市) や中富記念くすり博物館 (鳥栖市) にも、この薬に関する記録は存在しない。また、「薬理学博士」とも解釈できる肩書き (Arzneiwissenschaft Doktor) を有したガルが、実際に製薬を行っていた事実も確認できていない。
- 16 天野祐吉『嘘八百!—広告神髄トハ何ゾヤ』文春文庫, 1990年, 326頁。
- 17 松永俊男『ダーウィン前夜の進化論争』名古屋大学出版会, 2005年, 233-252頁。
- 18 ガブリエール・コンペレ『根氏心理学—教育応用』(ウキリアム・ペーン&能勢栄訳) 金港堂, 1893年, 附録28頁 (Gabriel Compayré, *Psychologie appliquée à l'éducation*, Paris, 1890, p.288)。
- 19 ゴッテス『埴氏心理学』(藤代清輔訳) 金港堂, 1895年, 286頁 (Friedrich Dittes, *Lehrbuch der Psychologie*, Wien, 1873, S.176)。
- 20 ハラルド・ヘフデング『心理学』(石田新太郎訳) 高等学術研究会, 1895年, 93-94頁 (Harald Hoffding, *Outlines of psychology*, London: Macmillan, 1891, p.52)。
- 21 ヴント氏『心理学概論』(中島泰蔵・元良勇次郎訳) 第2冊, 富山房, 1899年, 402頁 (Wilhelm Wundt, *Grundriss der Psychologie*, 2. Aufl., Leipzig: W. Engelmann, 1897, S.240)。同, 「旧及新骨相学」『人類及動物心理学講義』下巻, 集英堂, 1902年, 245-248頁 („Alte und neue Phrenologie,“ *Vorlesungen ueber die Menschen- und Thierseele*, 3. Aufl., Hamburg: Leopold Voss, 1897, S.508-513)。
- 22 亜歴山倍因『心理学』(矢島錦蔵訳) 1871年, 26頁 (Alexander Bain, *Mental science; a compendium of psychology and the history of philosophy*, American Book Company, 1868, p.10)。骨相学との関係については, Robert M. Young, *Mind, brain and adaptation in the nineteenth century: cerebral localization and its biological context from Gall to Ferrier*, New York: Oxford University Press, 1990, pp.121-133を参照のこと。なお, 内容的にバインの心理学に多くを依っているとされる文部省百科全書『人心論』(川本清一訳, 1878)に骨相学は言及されていない。
- 23 高島平三郎『心理綱要—師範学校教科用書』普及舎, 1893年, 278頁。
- 24 大瀬甚太郎『教育的心理学』広文堂書店, 1913年, 11頁。
- 25 富士川游『骨相と人相』『心理研究』心理学研究会, 第1巻1号, 1912年, 45頁。この記事は心理学通俗講話会での講話内容によるものと思われるが, 1910年2月19・20日に読売新聞朝刊に詳報された「人相と骨相」よりも詳細に論じられている。
- 26 川合貞一「近世心理学と骨相学」『新時代』第2巻1号, 新時代社, 1907年, 57頁。
- 27 西村茂樹『心学講義』第2冊, 丸善, 1885-1886年, 36丁オ-ウ。
- 28 Jerry A. Fodor, *The modularity of mind: an essay on faculty psychology*, Bradford Books, 1983 (『精神のモジュール形式—人工知能と心の哲学』(伊藤笏康・信原幸弘訳) 産業図書, 1985年)。
- 29 永峰春樹編『思出のまゝ』永峰春樹, 1928年, 25-26頁。
- 30 高橋文博「西村茂樹における洋学の基礎的研究」(科学研究費助成事業研究成果報告書), <<https://kaken.nii.ac.jp/file/KAKENHI-PROJECT-24520088/24520088seika.pdf>>, 2020年4月24日閲覧可能。『増補改訂 西村茂樹全集』第9巻 (日本弘道会, 2010)に所収の『理学問答』『査爾斯蒲勒氏要須理学』『人学訳稿』『可吉士氏人象学摘訳』は, いずれも骨相学に基づいた心理学または道徳論書である。なお, “phrenology”は「骨相学」と翻訳されている。
- 31 例え, George Combe, *Moral philosophy; or the duties of man*, Edinburgh: Maclachlan, Stewart, & co., 1840を参照。西村茂樹は, 本書を『道徳理学』のタイトルで抄訳している。
- 32 広池千九郎『道徳科学の論文』道徳科学研究所, 1960年〔初版1928年〕, 660-672頁。
- 33 井上円了に関する東洋大学の特設サイトを参照 (<<https://www.toyo.ac.jp/125thanniv/founder/>>, 2020年4月24日閲覧可能)。ガルの講演旅行については, John van Wyhe, “The authority of human nature: the *Schädellehre* of Franz Joseph Gall,” *The British journal for the history of science*, vol.35, no. 124, 2002, pp.17-42を参照。
- 34 井上円了『迷信解』哲学館, 1904年, 58頁。
- 35 井上円了「骨相論」『妖怪学雑誌』第5号, 妖怪学雑誌社, 1900年, 1-3頁。
- 36 小熊英二『単一民族神話の起源—(日本人)の自画像の系譜』新曜社, 1995年, 101頁。
- 37 John M. Mackenzie, *Propaganda and empire: the manipulation of British public opinion, 1880-1960*, Manchester University Press, 1984, pp.105-106。
- 38 アーレン・ハドック「骨相学上日本人欧米人の優劣 (米国商業界の杞憂)」『國民之友』第286号, 1896年, 43-45頁。
- 39 今村惟善『個性鑑別法の研究—如何にせば人の性格を察知し得るか』清水書店, 1915年, 2頁。
- 40 佐藤達哉「第4章 ポップとアカデミック」『通史日本の心理学』北大路書房, 1997年, 497-501頁。
- 41 高橋邦三「骨相学より観たる大隈伯」『商工世界太

- 平洋』第7巻14号, 博文館, 1908年7月, 44-46頁。
- 42 「骨相学上より見たる名士の悪相」『実業之世界』第6巻4号, 実業之世界社, 1909年4月, 77頁。
- 43 「珍物骨相画(三)」牟婁実業新聞, 1909年10月20日。実は, 南方熊楠の骨相診断風の記事である(厳密には骨相学ではないが)。
- 44 堀養父彦『西洋人相学解剖説明全書』堀養父彦, 1890年, 序。
- 45 佐々木猛綱『天壽要談』巖々堂, 1882年, 23-28頁。
- 46 横山尊『日本が優性社会になるまで—科学啓蒙, メディア, 生殖の政治』勁草書房, 2015年。
- 47 中村誠三郎『骨相試験土産の辻占』北村久吉, 1890年, 序。
- 48 市川紀元二(冥々生)『骨相学之応用』市川紀元二, 1900年, 序。
- 49 「日本唯一フレノロジー学館 小島敏悟」東京朝日新聞, 1895年3月20日朝刊, 6頁。
- 50 坪井秀人「第1章 KNOW THYSELF?—猫の観相学」『偏見というまなざし—近代日本の感性』青弓社, 2001年, 25-49頁。
- 51 高山宏『パラダイム・ヒストリー—表象の博物誌』河出書房新社, 1987年, 129頁。
- 52 坪内逍遙『小説神髓』岩波文庫, 2010年, 180頁。
- 53 前田愛『近代読者の成立』筑摩書房, 1989年, 369頁。
- 54 「茶ばなし」読売新聞, 1899年8月23日朝刊, 2頁。なお, 当記事から分かるこのときの逍遙の話は, 古代ギリシャ時代以来の四体液説に基づく気質論である。通俗的なこの医学理論は, 19世紀には骨相学などと結びつく形で議論された。日本でも, 「營養質」「運動質」「神経質」の三気質論が「骨相学」の名で論じられていた(鉛化生「新骨相学」『衛生新報』第49巻, 衛生新報社, 1906年8月, 2頁, など)。鈴木七美『癒しの歴史人類学—ハーブと水のシンボリズムへ』世界思想社, 2002年の第4章も参照。
- 55 松原岩五郎『最暗黒の東京』岩波文庫, 1988年, 132頁。
- 56 多木浩二『肖像写真—時代のまなざし』岩波新書, 2007年, 17頁。
- 57 亀井秀雄『身体・この不思議なるものの文学』れんが書房新社, 1984年, 24頁。
- 58 磯崎康彦・吉田千鶴子「第6章 明治29年の東京美術学校」『東京美術学校の歴史』三晃書房, 日本文教出版株式会社, 1977年, 78頁。
- 59 西野嘉章「医学解剖と美術教育—「腑分」から「藝用解剖学」へ」『学問のアルケオロジー』東京大学出版会, 1997年, 157頁。
- 60 森鷗外「ガルの学説」『鷗外全集』著作編第25巻, 岩波書店, 1953年, 310-329頁。
- 61 「日本唯一フレノロジー学館 小島敏悟」前掲註49。「好評の骨相学」読売新聞, 1914年6月23日朝刊, 7頁。
- 62 「骨相学実地試験」東京朝日新聞, 1900年5月15日朝刊, 2頁。
- 63 三宅辰次郎『生理心理学用脳紙模型説明』船井弘文堂, 1901年。
- 64 『性相(The Phrenology)』東京性相学会, 第68号, 1914年5月。骨相胸像は英米で人気があり, 例えば, ヴィクトリア時代に都市問題として騒がれていた劣悪な食品偽装について, “鉛屋が材料のかさ増しに混ぜている石膏は, ロリポップには不向きだが, 骨相胸像にはピッタリだ”, という『パンチ』(1858)の諷刺が利いたものになる程には流通していた(大嶋浩「18世紀後期から19世紀における英国の不純物混和文化史序説(4)」『兵庫教育大学研究紀要』第40巻, 2012年, 99頁)。
- 65 前稿で骨相学の翻訳書を列記した際に記載し損ねた, 英国の骨相学者セヴァーン(Joseph Millott Severn, 1860-1942)著の訳本『セヴァーン氏骨相学』(二村芳泉訳)漱文堂書店, 1921年を挙げておく。
- 66 多田盛大編『権道』第1号, 権道学館, 1892年, 41-45頁。
- 67 中村元ほか編『岩波仏教辞典』岩波書店, 1989年, 431頁。
- 68 Alfred Russel Wallace, *The wonderful century: its successes and its failures*, New York: Dodd, Mead and Company, 1899, p.193.
- 69 Piers Beirne, *Inventing criminology: essays on the 'Homo Criminalis'*, State University of New York Press, 1993. ケトラーの道徳統計については, 平野亮「道徳は〈測定〉可能か?—近代統計学の対象としての道徳」『研究論叢』第20号, 神戸大学教育学会, 2014年, 39-51頁を参照。
- 70 大塚仁「刑罰論における新・旧両派の理論的対立」『刑法における新・旧両派の理論』日本評論社, 1957年, 177-203頁。
- 71 西洋における骨相学と法学に関する先行研究に, Pierre Schlag, “Commentary: Law and phrenology,” *Harvard law review*, vol.97, 1997, pp.877-921.
- 72 中山茂春「石龍子と相学提要」『日本医史学雑誌』第55巻3号, 2009年, 371頁。
- 73 京城での石の講演を聴いた覆審法院長(高等裁判所長官にあたる)が影響を受けたり(「東京性相学会の大陸発展」『朝鮮公論』第4巻7号, 朝鮮公論社, 1916年7月, 44頁), 「職務の一助にとて人心看破の妙術を漁」っていたある司法官が「石氏及ガル氏」の性相学に出会い魅了されたりした(志水高次郎『性相

- 学一斑』足利友愛義団, 1926年), との記録が残る。『弁護士協会録事』には, 複数の名高い弁護士が, コーム『性相学原論』や播磨の著作の紹介・寸評を寄せていた。
- 74 ピエール=フランソワ・ラスネール『ラスネール回想録』(小倉孝誠・梅澤礼訳) 平凡社ライブラリー, 2014年, 239-243頁。
- 75 播磨龍城「性相時事(二)」『日本弁護士協会録事』第113号, 日本弁護士協会, 1907年10月, 46-47頁。「臀肉事件」については, 松本清張も取り上げている(松本清張監修『明治百年100大事件』下巻, 三一新書, 1968年, 71-76頁)。
- 76 富永孟『世界医学史』カニヤ書店, 1928年, 461頁。西洋については, Roger Cooter, “Phrenology and British alienists, c. 1825-1845,” *Medical history*, vol.20, no.1, 1976, pp.1-21 や, フレデリック・グロ『創造と狂気—精神医学的判断の歴史』(澤田直・黒川学訳) 叢書ウニベルシタス, 法政大学出版局, 2014年, 156頁(註6), も参照。
- 77 石龍子・播磨龍城「性相学上の精神病者検定」『日本弁護士協会録事』第103号, 日本弁護士協会, 1906年11月, 73-86頁。
- 78 森田正馬『健康と変質と精神異常』人文書院, 1936年, 64-68頁。
- 79 19世紀の尊属殺人犯リヴィエールの「法医学的鑑定書」には, 「専門成立以前の医学の知識水準」を代表した医師ブシャルが, 骨相学診断を行わなかったことを書き残している。「きわめて未発達」というのがその理由だったとはいえ, わざわざ骨相鑑定の未実施を断っていた事実が興味深い(ミシェル・フーコー編『ピエール・リヴィエールの犯罪—狂気と理性』(岸田秀・久米博訳) 河出書房新社, 1975年, 119頁)。
- 80 「私生子認知事件と性相家」『日本弁護士協会録事』第112号, 日本弁護士協会, 1907年9月, 65-66頁。
- 81 寺田精一「囚人の相(二)」『法学志林』第12巻4号, 1910年, 64-75頁, など。
- 82 ロンブローゾはまた, 教育家で神秘家の三浦関造による訳書『犯罪と遺伝個性の教育』(隆文館図書, 1916) などを通じて教育界と接続していた。
- 83 播磨龍城「性相学上刑罰を論ず」『明治学報』第123号, 明治学会, 1908年3月, 13-19頁。
- 84 石龍子・播磨龍城「性相学上, 矯正感化の理法と其実例」『日本弁護士協会録事』第102号, 日本弁護士協会, 1906年10月, 43-54頁。
- 85 リディア・ケイン&ネイト・ピーダーセン『世にも危険な医療の世界史』(福井久美子訳) 文藝春秋社, 2019年, 186頁。
- 86 フローバール『ブヴァールとペキュシェ』(鈴木健郎訳) 下巻, 岩波文庫, 1955年, 74-84頁。
- 87 ロドルフ・テプフェール『観相学試論』(森田直子訳) オフィスヘリア, 2013年, 11頁。
- 88 ジョン・エス・ハート『学室要論』(ファン・カステール訳, 小林病翁校) 文部省, 1876年, 207-226頁(John S. Hart, *In the school-room: chapters in the philosophy of education*, Philadelphia: Eldredge & Brother, 1868, pp.121-129)。
- 89 ヘンレ・キッドル&アレキサンドル・ジェー・スケーム編『教育辞林』(小林小太郎・木村一步訳) 第4冊, 文部省, 1880年, 38頁(Henry Kiddle and Alexander J. Schem, *The cyclopædia of education*, New York: E. Steiger, 1877, p.122)。
- 90 アルフレッド・ホルブルーク『和氏授業法』文部省, 1879年, 9頁(Alfred Holbrook, *The normal; or the method of teaching the common branches*, New York: A. S. Barnes & Burr, 1859, p.13)。
- 91 高橋邦三「生理心学一斑」『教育公報』第235号, 帝国教育会, 1900年5月, 20-25頁。
- 92 高橋邦三「脳皮質局部作用」『教育公報』第315号, 帝国教育会, 1907年1月, 4-8頁。同, 「脳皮質局部作用(承前)」『教育公報』第316号, 帝国教育会, 1907年2月, 18-22頁。同, 「脳皮質局部作用(承前)」『教育公報』第317号, 帝国教育会, 1907年3月, 17-21頁。
- 93 柳井道民『超然教育学』文学同志会, 1903年。
- 94 竹熊利雄「教育的フレノロジー(Phrenology)」『小学校』同文館, 第30巻3号, 1920年11月, 59-62頁。同, 「教育的フレノロジー(中)」『小学校』同文館, 第30巻4号, 1920年11月, 60-63頁。同, 「教育的フレノロジー(下)」『小学校』同文館, 第30巻6号, 1920年12月, 65-68頁。
- 95 横山榮次『教育教授の新潮』弘道館, 1908年, 118頁。
- 96 松夢「骨相学と教育」『南満教育』第43巻, 南満州教育会, 1924年9月, 1-2頁。
- 97 David Bakan, “The influence of phrenology on American psychology,” *Journal of the history of the behavioral sciences*, vol.1, no.1, 1965, pp.200-220.
- 98 平野亮「能力」と「脳力」—近代教育用語としての2つの〈ノウリョク〉『兵庫教育大学研究紀要』第53巻, 2018年, 15頁。
- 99 大部慎之佑「大正新教育の衰退と変容の諸相—関東大震災を契機とした教育言説の変容に着目して」2017年度兵庫教育大学大学院修士論文, 72-73頁。他に, 佐藤晋平「明治・大正期における児童の科学的研究と頭囲測定」『日本教育史往来』第178号, 日本教育史研究会, 2009年, 1-3頁や, 平野亮「人体計測のなかの数学」佐藤健一ほか編『数学史事典』丸善出版(近刊予定)も参照。



- 100 三田谷啓『子供の智識の導き方』刀江書院, 1936年, 60-68頁。
- 101 高村静眠『精神胎内教育鑑』高村守太郎, 1923年。
- 102 市川紀元二『骨相心理学応用 自己及児童教育』市川紀元二, 1902年など。
- 103 例えば, O. S. Fowler & L. N. Fowler, *The illustrated self-instructor in phrenology and physiology*, New York: Fowler and Wells, 1857。なお, 「修養」について江戸時代以来の関連語彙と思想を検討した, 西平直「修養の構造」『教育学研究』第86巻4号, 日本教育学会, 2019年, 473-484頁も参照。
- 104 小学校を卒業しただけの読者も多かった『実業之日本』は, 創刊当初から「社会教育機関の役割を果たすという啓蒙的な性格をもっていた」という(馬静『実業之日本社の研究—近代日本雑誌史研究への序章』平原社, 2006年, 7頁)。
- 105 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』青木書店, 1974年。
- 106 片桐正雄『快心健体治病の福音』健寿修養会, 1922年, 136-139頁。井川観象『名前のつけ方』富山房, 1926年, 7-9頁。後者は, 「努力に追ひ着く不運なし」というタイトルが面白い。
- 107 岩井洋『記憶術のススメ』青弓社, 1997年, 79-94頁。
- 108 西端学「食養法と性相学」『食養雑誌』第58号, 食養会, 1912年8月, 7-11頁。
- 109 葵文庫所蔵の *The principles of physiology* のほか, *A treatise on the physiological and moral management of infancy*, Edinburgh: Maclachlan & Stewart, 1840 など。
- 110 David B. Hershenson, "A head of its time: career counseling's roots in phrenology," *Career development quarterly*, vol.57, no.2, 2008, pp.181-190.
- 111 石田東向「骨相の教育的研究」『小学校』第5巻5号, 同文館, 1908年6月, 62-64頁。
- 112 稲富栄次郎監修『教育人名辞典』理想社, 1962年。
- 113 高橋直子『オカルト番組はなぜ消えたのか—超能力からスピリチュアルまでのメディア分析』青弓社, 2019年。1966年発行の日本民間放送連盟『民放連放送基準解説書』に次の記述がある。「現代人の良識から見て非科学的な迷信や, これに類する人相, 手相, 骨相, 運命・運勢鑑定等を取り上げる場合は, これを肯定的に取り扱わない」。これは2015年改正の最新版にも踏襲されている(日本民間放送連盟, <<https://www.j-ba.or.jp/category/broadcasting/jba101032>>, 2020年4月24日閲覧可能)。
- 114 Roger Cooter, *The cultural meaning of popular science: phrenology and the organization of consent in nineteenth-century*, New York: Cambridge University Press, 1984。ステイーブン・シェイピン「エディンバラ骨相学論争」『排除される知—社会的に認知されない科学』(ロイ・ウォリス編, 高田紀代志ほか訳) 青土社, 1986年, 133-200頁。
- 115 新しい翻訳概念だった「能力」の語を早い時期から必須の用語として用いたのは, 法律学と教育学—心理学であった(平野, 前掲註98)。

補遺) 本論文は, 平成31年~令和3年度日本学術振興会科学研究費補助金「近代日本における〈骨相学〉の受容と展開に関する教育史的研究」(研究代表者: 平野亮, 19K14063, 若手研究) の研究成果の一部である。